

認知症も、軽いうちなら、治療効果が期待できるかも。むしろ、むしろ。

80歳のNさん。離れて暮らす娘さんに連れてこられた。「父は、この頃忘れっぽい。何度も、同じことを聞き返す。認知症では？」というのである。確かに、もの忘れのテストの点数は悪い。頭のMRI（磁気共鳴画像）の検査でも、海馬を中心に脳の萎縮がみられるではないか。アルツハイマー型認知症が疑わしい。

だが、奥さんに「Nさんの日常生活に支障（生活障害）がないか？」と聞いても「目立ったものはない」「と言いつ張るのだ。「怖い運転をしないか？」「約束した日や場所を間違えなかったか？」「いつまでも汚れたものを着ていないか？」などと、具体的な質問をしてみても、ノーなのである。

医学的には、もの忘れがあっても生活障害がなければ、認知症とは言えないという。が、ここで結論を急いではいけない。そうだ。Nさんには、生活障害があるはずだ。もちろん、奥さんがフソをついている

とは思わない。ただ、Nさんの生活障害に気付かないでいるだけかもしれない。

70才を過ぎた高齢者の生活は、多くは単調なものだ。決まった時間に起き、洗顔して歯を磨く。食事のあとは、新聞を読み、テレビを見て、黙って一日を過ごす。この程度の単純な行動には、深刻な間違いも起こりにくいだろう。

だが、半年から1年も過ぎれば、単調な生活の中でもミスが増え、目立つようになる。で、ようやく、認知症の診断がつくことになるのだ。が、それでは遅いのだ。家族としてはあ、相手が高齢者、ことに後期ともなれば、「もう認知症が始まったのではないか？」と疑いの目で見守ったほうが良いのかも。高齢者に見れば、なんともイヤな感じだ。が、それくらいは覚悟しなければ。

（石黒修三）いこへんクリニック・脳神経

外科医…10/3 北國新聞掲載